文化・経済フォーラム滋賀 News Letter

第 11 号（2023 年 12 月）

第 16 回文化ビジネス塾（令和 5 年度ビジネス・カフェ in 文化産業交流会館との共催）を開催しました。

“次世代” と考える地域拠点『劇場・文化ホール』のこれから～芸術・文化を仕事にする？しない？～

令和 5 年 (2023 年）11 月 5 日（日）14:00～16:30 ／滋賀県立文化産業交流会館 小劇場

事例発表・パネルディスカッション
登壇者｜澤田 青空 氏、粒来 楓彩 氏、吉田 佐和子 氏、袴田 美帆 氏
アドバイザー｜中川 幾郎 氏、藤野 一夫 氏

進行｜熊井 一記（くまい かずのり）氏
劇場音楽堂等連絡協議会事務局長
神戸文化ホール事業課長

新型コロナウイルスも 5 類に移行して、私もこうしてマスクなしで皆さんにごあいさつできるようになりました。感染の始まった当初は、芸術文化も不要不急のレッテルを貼られた時期がありました。でも、公演がなくなってしばらくたってくると、皆さんなんていうか、ビタミン欠乏症のような感じになってきて、逆に、芸術文化というのは本当は必要なものだったんだと感じるようになったのではないでしょうか。劇場は学校や病院と同じように、人間が生きていく上で必要不可欠なものだということを、コロナが改めて気づかせてくれたように思います。確かに大変な時期を過ごしたわけですが、この間、色々な課題が表に出てきて、今改めて劇場・文化ホールをどうやっていくのかを考える時期に来ています。ピンチの後にチャンスありと言いますが、チャンス到来ということで、若い方々とこれからどうするか一緒に考えたいと思います。　《山中代表幹事あいさつより》

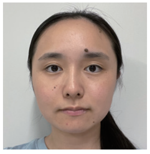
澤田 青空（さわだ そら）さん

大阪音楽大学 4 年

劇場・文化ホールは開かれた音楽の場、芸術の場を

大学ではミュージックコミュニケーション専攻に所属し、地域、社会における音楽とは何だろうというテーマで学んでいます。ゼミでは、公園を会場に、その場に居合わせた人がふらっと自由に参加できる音楽の場を作っています。ポイントは、パブリックスペースであること。壁がなくて、すぐに人が入れる場所でこそ音楽が人と地域、社会とつながる一番いい場所かなと思っています。

地元・彦根市では、フリースクール『てだのふあ』で “てだのおと” という音楽教室を担当しています。ここの先生から「てだのふあは学校に不安や息苦しさを抱え、心身ともに疲弊してしまった子どもたちの居場所です。“てだのおと” は、まさに子どもたちの心を解き放つ活動と実感しています。」と言ってくださっています。令和 4 年度のデータで、不登校の児童生徒は約 30 万人と言われます。不登校の児童生徒が増えている中で、芸術文化という力が重要になっていく。そのためには、劇場・ホールは拠点として一緒に子どもたちを育てていくという姿勢が必要でないかと感じています。劇場・ホールは 100 年、200 年と続く音楽を伝えていかないといけない部分もあると思います。しかし、現代に生きる私たちがフラットに参加できる音楽の場、芸術の場があるべきではないかと考えています。



粒来 楓彩（つぶらい　ふうあ）さん

芸術文化観光専門職大学 3 年

文化施設は地域に受け入れられるアプローチを

大学では、文化施設と地域とのより良い関係の構築について研究しています。豊岡演劇祭は多くの観光客で盛り上がります。もっと住民と盛り上がりを共有したいと、ステッカーで商店街の魅力を観光客に伝える企画をしました。図書館をコミュニティの場にしたいと、養父市立図書館では交流ノートの設置と図書館交流員を配置しました。

今、文化施設に求められている役割は、昔よりどんどん拡張されていて、社会包摂機能や、住民同士のコミュニケーションを支える場などの意味合いを含むようになっています。劇場では静かに座って鑑賞すべきという従来の認識が、劇場本来の持つ汎用性を打ち消している側面があるのではないかと思います。お子さんや障害を持たれている方は、大きな音を立ててしまうのではと劇場から距離を置かれることもありますが、それも観客の意思表示として捉えて許容する、拒絶しない劇場づくりが必要になっていくと思います。私の地元・青森県八戸市は多くの地方と同様、芸術文化の分野で都市部との格差を抱えています。地域住民の芸術文化に対する疑念、反発という問題もあります。私が感じた文化施設のミッションは、地域を受け入れ、地域に受け入れられる劇場・音楽堂の実現です。その過程で、地域の文化施設が連携して、各機能を最大限活かせればと考えます。

令和 5 年度 滋賀アートプラットフォーム事業　びわ湖・アーティスツ・みんぐる 2023（（公財）びわ湖芸術文化財団地域創造部との共催）

♫ガチャ・コン音楽祭 vol.3　～つくるはつづくよ　どこまでも～

9 月 18 日（月・祝）@近江鉄道「高宮駅」（彦根市）

近江鉄道（ガチャコン）沿線を舞台にした地域とアートが結びつく音楽イベント。滋賀の太鼓をテーマに、音楽、ダンス、美術で新しいパフォーマンスをつくり、高宮駅を舞台に上演。突然の雨も太鼓の音のようだとご声援をいただきました。

🎶C3（シーキューブ）　～古典と現代音楽の《関》～

10 月 28 日（土）@フィガロホール（大津市） 2020 年文化で滋賀を元気に！賞大賞受賞者

現代音楽 × 弦楽四重奏の切り口で、滋賀の魅力を発信する演奏会。今回は、世界的な作曲家・酒井健治さんに比叡山をテーマに新曲を委嘱。奏者の息づかいまで聴こえる会場で、緊張と迫力が身体に伝わる楽しい演奏会でした。

フィガロホールは、十一月、滋賀県文化功労賞を受賞されました。

吉田 佐和子（よしだ さわこ）さん

（一社）福知山芸術文化振興会、（株）Locatell 代表

演奏者から経営者として地域の文化力向上を目指す

クラリネット奏者として活動していましたが、コロナの影響で演奏の仕事が全てなくなり、洋菓子店のブランディングに携わりました。その経験から、音楽業界で身につけたスキルは別の業種でも活かせると知りました。また、改めて自分が何をしたいのか考える機会となり、音楽ホールをつくる福知山音楽プロジェクトを始めました。拠点を作ることに、18 歳の時に感じた地方と都会の文化体験格差への答えがあるのではと考えたのです。その後、福知山市も文化ホールを建てることになり、経営的な判断でプロジェクトのホール建設は休止し、ソフト事業は有志で設立した福知山芸術文化振興会で継続しました。事業では、音楽・演劇・ミュージカル・ダンスなど様々なジャンルを行い、若手の起用にこだわっています。また、地域の文化力を上げるためには、著名なアーティストを呼ぶだけではなく地域のアーティストと共に協働することが大切です。財源は経営する株式会社からの資金と、補助金、助成金を活用。また、新たな取組として、地元の信用金庫と協賛金を集めるワークショップをします。展望として、少人数でも豊かな内容を届けられるよう、福知山に住んで働く専門人材を雇うことを検討しています。

新文化ホールについて考えるきっかけを
地域と芸術文化について考えるトークイベント

演劇の手法を用いた認知症へのアプローチ

18歳は入場無料『アートであそぼう』

袴田 美帆（はかまだ みほ）さん

サクソフォン奏者

アーティストもコミュニケーションをとって企画を

サックスが好きで、交換留学でフランスに行ける大学を選び、アートマネジメントに出会いました。アートとお客様を繋ぐ仕事があることを知り、勉強しながら企画や運営に携わるうちに、プロのアーティストになったらもっと楽しい企画が実現できる気がしました。フランス留学で演奏技術も上げて、色々な文脈の演奏会に出演させていただき、音楽と社会を繋ぐ奏者になりたい思いました。私が思うプロフェッショナルな仕事は、演奏会を通して人と繋がって世界観を共有し、共感いただいた方がまたこの人の企画した演奏会に行きたいという流れができること。フランスで影響を受けたのが食の分野。シェフは、自分が大切にしているものを体験してもらうことを常に考えています。場所や空間をどう作るか、皿やパッケージはどうするか。そういうことにすごく時間とお金をかけています。これは演奏にも言えることで、お客様に体験をお届けするために、アーティストも色々なつながりを考え、コミュニケーションをとりながら企画できる人が増えたらいいなと思います。今後は、サクソフォン奏者としての活動の幅を広げていくと同時に、吉田佐和子さんの会社でフランス音楽留学サービスのお手伝いをします。フルリモートのフレックスで、時間の使い方が調整できるので、演奏活動も続けることができています。

＊＊＊アドバイザーコメント・クロストーク ＊＊＊

中川幾郎先生（帝塚山大学名誉教授）：

澤田さんの発表からは、芸術を生活化するという視点を教えられました。粒來さんのお話は、私たちが主張していることと通じています。誰にでも広く鑑賞できるようにというと、インクルーシブ（包摂）にならないで、ポピュリズム（大衆迎合的）の発想になる危険性があります。みんなが好きなポピュラーなものが選択されてしまう。社会包摂機能を持つ劇場のコンセプトを、この世代がきちんと押さえていることに感銘しました。吉田さんはしっかりした問題認識をお話しされました。文化芸術の地域格差は、公共政策の責任です。地元の自治体に政策提案をしていくことも大事かと思います。袴田さんのお話も胸を打ちました。プロフェッショナルとは、この場合、職業的という意味です。食べていくには、それなりの活路つまり市場が必要。商業的なプロバイダーに任せていてはダメです。アーティストの力で福祉、医療、教育などの政策にもっとアートを供給することが一般化されるよう努めるべきだと思います。

藤野一夫先生（芸術文化観光専門職大学副学長、神戸大学名誉教授）：

今日は若い人たちから大きな夢をプレゼントしてもらいました。吉田さんの動きを見ても、これからは、音楽家でも起業という可能性があるのだと感動しました。「芸術文化を仕事にするか、しないか」は、大きなテーマです。劇場や文化ホールが若者に選ばれる職業になるのかが今問われと思います。選ばれるためには、課題が何で、どう変えれば良いのかを考えなければいけない。

まず、指定管理者制度の 20 年間、劇場・音楽堂等の運営を担う人材が育っていない。そして、現在、要職を担うべき働き盛りの層で、専門人材が枯渇・払底してしまっている。資金不足と指定管理者制度は連動していると考えていて、公募による指定管理料の引き下げと、指定管理期間の限定による正規職員の雇用控えが原因です。そこで提言ですが、専門職の資格制度を導入すべきです。特効薬とは言えないが、施設の運営を持続可能にする重要な戦術にはなるだろうと考えています。もう一つは、多層的な連携、連帯。①地域の文化団体、商店街、市民組織、大学・教育機関など、多分野間でのネットワーク化を公共文化施設が中心になって進めるべき。そして、②県内の公共文化施設間でのネットワーク化。さらに③共同制作、芸術団体との連携、ネットワーク事業。最後は④人材育成での連携。職員や市民のリカレント（学び直し）やリスキリング（新しいスキルの習得）を進めていく。

熊井：劇場法では、文化施設には専門人材が置かれることになっています。そして、事例発表にあったように街に出て活動する、人が交流する場を作る、また文化施設そのものが人を育て、街の人たちと色々な機能を繋いでいくことが当然期待されています。そうした拠点としての機能が文化施設に求められることが、今日のお話で裏付けられたと思います。大学生のお二人は卒業後をどのように考えていらっしゃいますか。

澤田：私は芸術文化を仕事にしない選択をしました。でも、将来的には地元の彦根市で、吉田さんのように芸術文化の仕事をしていきたいです。

粒來：私は地元の八戸市で芸術文化に携わる活動を文化施設でできたらいいなと考えています。

熊井：これからの文化施設は色々な人がきちんと出入りする場であること、地域にどんな活動者がいるか知ることも重要ですね。

藤野：次の世代の人たちが見据えなければいけないのは、地域課題を解決するために、芸術文化を一つの媒体として、それ以外の分野と繋がっていくことが重要です。外と繋いでいく地域コーディネーターのような人もプロフェッショナルとして必要になってきます。行政の縦割りの中でやっていては難しいので、NPO や一般社団などがリーダー的な存在となって、芸術文化と医療などの他の分野をうまく掛け合わせて地域課題を解決できるようにしていく。このような点が地方に行けば行くほどあるのではないかと思っています。

熊井：ありがとうございました。現場や地域の人たちにとっていくつかヒントがありました。本日の議論を含めて、提言にまとめていきます。

文化経済サロン①　令和 5 年（2023 年）6 月 18 日（日）／びわ湖ホール研修室

コロナ以後に問い直す地域の公共劇場・文化ホールの公共性

講師｜中川 幾郎氏（なかがわ いくお）
帝塚山大学名誉教授

コロナで文化ホールはどんな目に遭っているのか

オーケストラは非常に経営が苦しくなった。アーティストは、出演の機会が減って大変困った状況になった。舞台裏のバックヤードを担当している技術者も職場の流動性が加速している。この背景にはコロナの経済的なインパクトが大きい。でも、それは何も劇場・ホールだけのことではない。コロナにより、むしろ劇場とか音楽堂が持っている公共的かつ公益的な使命というものが浮上してきた。公共的・公益的な使命の自覚がなかった劇場・ホールは、ほとんど開店休業状態に追い込まれたのではないか。

図書館、博物館、美術館、音楽ホールに行く習慣の有無が学力のハンデに

文部科学省の調査によると、近くに博物館や美術館があって、見に行く習慣があるという家庭の子どもの算数と国語の平均ポイントは、習慣がない子どもに比べて 10 ポイントは差がついている。近くに音楽ホールがあって、よく鑑賞に行く家庭の子どもは、国語も算数も 7、8 ポイント高い。図書館にいたっては 10 ポイント以上。地方の子どもは、東京や大都市近郊の都市の子どもに比べて学力的にハンデがついていく。図書館をつくる、美術館をつくる、博物館をつくる、そして音楽ホールを作るという運動をした滋賀県の「文化の幹線計画」は正しかったという結論になる。ところが、また地域偏差が上昇してきている。今はこれを市町がどう考えるか。

法律で裏付けられる劇場・音楽堂の公益機能

文化芸術基本法では社会包摂という概念が非常に強く出た。劇場法では、教育、福祉、医療機関との連携と地域コミュニティの活性化への貢献が書かれる。従って、劇場・音楽堂は大きく二つに大別されるのではないか。貸し館機能だけのホールと、自主事業を制作する人的・専門的機能、教育機能を備えた施設込みのホール。もはや劇場・ホールは、社会教育あるいは社会福祉の機能をもった専門施設にならざるを得ないところに法律的にもきていることが、コロナ以後、余計に浮上してきたと思う。アーティストも社会公益的事業に登用していくべき。それを市場の力だけで委ねてしまうと、アーティストも劇場も滅んでしまう危険性があります。

＊意見交換＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

社会に出ていくことが難しい子どもに劇場はどう関わる

会場 A：不登校の子どもが増えています。社会に出ていくことが難しい子どもはどうしたら文化と触れ合う機会が得られるか。劇場はどう関わるか？

中川：市町の劇場は、学校に行くのが嫌だったら、うちの劇場においでよ、というようなことをやってもいいと思います。そういう能力・教育を受けた職員を置いてほしい。子どもたちは多様化しているし、こういうホールはこれから増えてくる。

子どもの頃の経験と文化の伝承

会場 B：文化の伝承を応援していきたいと行事をするのですが、若い人に声をかけても集まらない。若い頃に経験している人の方が、年齢を重ねて、またそのことに興味を持つことがわかってきております。学校教育で伝統文化、伝統芸能を取り入れていただけないかと最近思うようになりました。

中川：大変重要な話です。佐渡に行ったときに能楽堂が多くて驚きました。当時の人にとって能の謡は、今でいうカラオケなんだろう、楽しかったんだろうなと。同じようなタッチで教えるのが大事かもしれない。謡えるのは格好いいという文化を回復する、頑張ってほしい。

文化経済サロン②　令和 5 年（2023 年）7 月 28 日（金）／びわ湖ホール研修室

コロナ禍の危機を経て地域の劇場・文化ホールはいかにあるべきか

講師｜藤野 一夫氏（ふじの かずお）
芸術文化観光専門職大学副学長
神戸大学名誉教授

新型コロナウイルスの影響下におけるアンケート

2020 年 12 月～2021 年 7 月に行った演劇関係者 5,300 人へのアンケートで、死にたいと思った人が 3 分の 1 にのぼった。喜びを人々に提供するべきアーティストが自ら死にたいと思ったのです。神戸大で行った調査では、2020 年 2 月～12 月の兵庫県全体の文化分野で個人 220 億円、団体事業所 370 億円、約 590 億円の損失という算出ができました。ただ、日本では文化関係の統計データが不完全ですので、本当にこれを実証できるかどうかは難しいところでした。活動で困っていることで印象的だったのは、自粛警察とかバッシングがこれからまだ続くのでないかということでした。

コロナ禍とアートマネジメント

アートマネジメントというのは、人の喜ぶのを見て喜ぶこと、これが源泉だと思っています。しかし、その喜びの共同体から疎外されてしまうということがコロナ禍の 3 年間で起きていた。そしてその仕事から離れてしまった人もたくさん出てきてしまったということだと思います。そして、アートマネジメントは連帯感や民主主義の絨毯を紡ぎ上げる仕事だと私は考えていますが、そういったこともなかなか理解されなかったというのが、コロナ禍の 3 年間でした。

公立文化施設と「文化的コモンズ」の形成

市町には、まちづくり団体とか商店街、市場産業、美術館や博物館もある。学校もある。神社仏閣もあり、お祭りもある。文化的コモンズとは、そういったところと多様なネットワークを結ぶ、そのハブになるべきだという考え方で、東日本大震災の後に（一財）地域創造が出した提言によるものです。公立文化施設は文化的なつながりを求めて人々が集まり、地域の記憶と共感の装置として機能する文化拠点なのだと。文化的コモンズを形成する拠点として文化施設を位置づけていくことがコロナ後、ますます重要になってくるという認識を持っています。

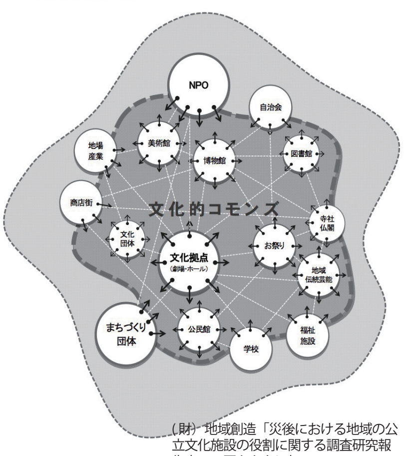
芸術が引き金となる持続可能な地域社会

滋賀は、地域資源、例えば自然や伝統文化などの宝庫です。ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例が 1984 年にできています。これも活用できます。リソースは資源で、それだけでは何も力を発揮しないが、アートにはリソースからキャピタルへ変える力があり、それを引き出していくのがアートマネジメントだろうと考えています。キャピタルは、社会と人間を発達させる源、力を引き出す源です。

豊岡では 10 年前に城崎国際アートセンターを作りました。豊岡演劇祭を始め、市内の全校に演劇的手法を用いたコミュニケーション教育を取り入れた。そして大学ができました。地場産業の付加価値が高まり、交流人口の増加で経済力が生まれ、投資で還元されていく。

最初に芸術が引き金になり、社会を変え、それが最後は経済をも動かすというようなバリューチェーンができることによって、東京や大都市圏に依存しない持続可能な地域社会が成立していくのではないか、と考えているところです。

【文化的コモンズのイメージ図】



（財）地域創造「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究報告書」の図をもとに加工

副代表幹事の南千勢子さん（ピアニスト）が、
令和５年度地域文化功労者表彰を受賞されました。
地域文化功労者表彰は、多年にわたり、芸術文化の振興、文化財の保護等、地域文化の振興に顕著な功績のあった個人および団体に対し、その功績をたたえて文部科学大臣が表彰するもので、昭和 58 年から行われています。

木村相談役から南副代表幹事へ花束贈呈

会員の３名の方が今年春の叙勲を受章されました。
瑞宝中綬章　西嶋栄治さん（元県副知事）
瑞宝小綬章　川口逸司さん（元県総務部長）
旭日双光章　松山克子さん（元湖南市議）＊
＊フルートオーケストラ湖笛の会会長

第 14 回文化・経済フォーラム滋賀 総会・講演会

講演会
発酵で滋賀を元気に！

講師
日本の発酵学の第一人者
小泉 武夫 氏
（東京農業大学名誉教授）

鮒ずしなど優れた発酵文化を持つ滋賀。体と文化経済に良い発酵文化のススメについてお話をお聞きします。

演奏会
びわ湖ホール声楽アンサンブル

ソプラノ	高田 瑞希
メゾソプラノ	藤居 知佳子
テノール	谷口 耕平
バリトン	市川 敏雅
ピアノ	宮本 遥花

令和6年（2024年）
2 月 17 日（土）14 時開演（13 時 30 分開場）
会場　びわ湖ホール

入場無料　全席自由

事前の申し込みが必要です。
お申込み方法はウェブサイト、チラシをご覧ください。

日　程

14:00～16:30　会場：びわ湖ホール小ホール（地下１階）
びわ湖ホール声楽アンサンブル演奏会
「2023 文化で滋賀を元気に！賞」表彰式
小泉武夫氏講演会
文化で滋賀を元気にする提言発表

16:50 ～17:20　会場：びわ湖ホール研修室（３階）
第 14 回文化・経済フォーラム滋賀　総会

17:30～19:00　会場：びわ湖ホールラウンジ（２階）
・交流会（交流会費：お一人様につき 5,000 円）
＊交流会費は当日受付にてお願いいたします。

第 14 回総会を行います

日時：令和 6 年（2024 年）2 月 17 日（土）
16:50～17:20
会場：びわ湖ホール研修室（３F）
議事
・令和 5 年度事業報告及び収支決算
・令和 6 年度事業計画及び収支予算

2023-2024 年　幹事（役員）==================

相 談 役｜木村至宏、石丸正運、中村順一
代表幹事｜山中隆
副代表幹事｜田中健之、南千勢子
幹　　事｜秋村洋、井伊亮子、井上建夫、加藤賢治、川添智史、小磯亮、髙梨純次、谷口義博、西川忠雄、馬場章、保坂健二朗、村田和彦、山本勝義、竹村憲男
監　　事｜西堀武、村岡孝浩

令和６年度会員継続のお願い

文化・経済フォーラム滋賀は、「文化で滋賀を元気に！」を合言葉に発足以来、会員の皆さまのアイデアとネットワークを活かして滋賀の未来を考える事業に取り組んでいます。活動は、皆さまの会費で運営されています。１月は会員継続手続きの月です。ご案内を郵送させていただいておりますので、令和６年度におかれましても、ぜひとも引き続き会員をご継続いただき、「文化で滋賀を元気に！」する活動にご参画いただきますようお願い申し上げます。

年会費
個人・団体会員　一口　5,000 円
法人会員　一口　20,000 円

文化・経済フォーラム滋賀　第 1 回～第 13 回総会・講演会

＜年＞	＜総会＞	＜講演会 講師＞		＜参加人数＞
H23(2011)	1 回	鷲田　清一	大阪大学総長	163 人
H24(2012)	2 回	大原謙一郎	大原美術館理事長	147 人
H25(2013)	3 回	蓑　　豊	兵庫県立美術館長	230 人
H26(2014)	4 回	田村　孝子	グランシップ館長	107 人
H27(2015)	5 回	姫野カオルコ	150 回直木賞作家	307 人
H28(2016)	6 回	山極　壽一	京都大学総長	253 人
H29(2017)	7 回	津田　和明	サントリー元副社長	113 人
H30(2018)	8 回	小林　　徹	オプテックス会長	117 人
R 1 (2019)	9 回	北川フラム	アートディレクター	123 人
R 2 (2020)	10 回	澤田　康彦	前「暮しの手帖」編集長	177 人
R 3 (2021)	11 回	養老　孟司	東京大学名誉教授	677 人
R 4 (2022)	12 回	隈　　研吾	建築家・東京大学特別教授	239 人
R 5 (2023)	13 回	今森　光彦	写真家	198 人

＊敬称略、役職当時

＜提言タイトル＞

H24(2012)	文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を
H25(2013)	文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ
H26(2014)	滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ
H27(2015)	自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を　～“近江遺産”“近江八百八景”から日本遺産そして世界遺産へ～
H28(2016)	新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ
H29(2017)	世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを　～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～
H30(2018)	地域文化を育む、新たな観光を創造する
R 1 (2019)	アーティストと地域をつなぎ、新たな文化を育む
R 2 (2020)	文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進
R 3 (2021)	アートを地域のプラットフォームに　～文化と経済の連携を深める新しい視点の研究～
R 4 (2022)	創造の現場に若い世代の活躍の場をつくり、地域の原動力に
R 5 (2023)	博物館は地域社会に貢献できるのか　～近江国の文化財をどのように継承し活用するか、博物館の使命とは～

[発行・問合せ] 文化・経済フォーラム滋賀　〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 15-1　滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール内
電話：077-523-7146　FAX：077-523-7147　電子メール　bunka-keizai@biwako-arts.or.jp
https://www.biwako-arts.or.jp/rd/bunkakeizai/